様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３８１

研究課題名（和文）20世紀初頭の西・南アジア境界域におけるアフガン人武器交易ネットワークの研究

研究課題名（英文）Study of the Afghan arms trade network in the frontier zone of Southwest Asia during the early 20th century

研究代表者
小澤　一郎（Ozawa, Ichiro）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：５０８１７２１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末から20世紀初めにかけてのユーラシア大陸西南部とそこに接続する海域を舞台として武器交易を展開したアフガン人の活動を検討対象とし、①アフガン人が遊牧生活を基礎とする移動交易民としての性格を色濃く残しつつ交易活動を展開していたこと、②アフガン人の活動がユーラシア大陸西南部の多様な集団のネットワークとの交錯の上に成り立っており、特にバルーチ人との協力関係が彼らの海洋への進出を可能にしたこと、③イギリスがアフガン人と他の集団とのコネクションを切断する形で交易規制を行ったために彼らの活動の周縁をもたらし、そのことが当該地域の周縁化を招いた可能性があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は陸海に渡るアフガン人の交易活動の実態を明らかにすることで、従来必ずしも統一的な視点の下で理解されてこなかったユーラシア大陸の陸上交易とインド洋海域の海上交易を接続する効果を持つ。また、ユーラシア大陸西南部において多様な集団が自身のネットワークが互いに接続させながら交易活動を展開していたことからは、これまでの研究であまり注目されてこなかったフロンティアとしてのユーラシア大陸西南部の歴史的重要性が明らかになる。さらに、イギリスの交易規制によるアフガン人の活動の終結は、近代の到来によってこの地域が周縁化し、現在のように周辺国家にとっての「辺境」と化していく過程を示しているといえる。

研究成果の概要（英文）：The focus of this research project is the arms trade conducted by the Afghans during the late 19th and early 20th centuries in southwestern Eurasia and the adjacent maritime region. The project yields three main findings: 1) The Afghans maintained their identity as mobile traders with nomadic roots in their trade activities; 2) The Afghans' engagement in trade was facilitated by the intersection of their network with various groups in southwestern Eurasia, leading to their expansion into maritime trade through collaboration with the Baluchs; 3) Britain responded to the Afghans' arms trade by severing their connections with other groups, thereby terminating their activities and expediting the marginalization of southwest Eurasia among nations such as Iran, India (Pakistan), and Afghanistan.

研究分野：西・南アジア史

キーワード：アフガン人　武器交易　バルーチ人　イギリス帝国　ガージャール朝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）交易民としてのアフガン人への注目

本研究で主たる研究対象としたアフガン人の武器交易は、これまで主に交易を取り締まる周辺地域の政治権力（英領インド、ガージャール朝イラン、バーラクザイ朝アフガニスタン）の立場から検討されてきた。このため、三国家それぞれの立場を反映する形で、アフガン人たちは「治安への不安定要素」「危険な略奪者／密輸業者」などと評価される傾向があった。このため、アフガン人を「主語」とし、彼らの主体性を重視しながらその活動を検討していくことにより、ユーラシア大陸の交易史を新たな側面から解明できる可能性があった。

（２）国家単位での歴史叙述を超越する必要性

本研究で対象とした地域はインド・イラン・アフガニスタンの国境地帯に当たるが、特に近代以降については国家単位での歴史叙述のはざまに置かれ、その歴史的位置付けが問題となることはなかった。この地域を一体の、自立的／自律的な地域として捉えなおすことは、近代の西アジア・南アジアについてはいまだに一般的な、国家単位での歴史像を相対化する契機となることが期待された。

（３）陸上交易と海上交易の分断をめぐって

これまでの交易・商業史は、陸域・海域どちらかに焦点を当てて行われる傾向があった。これはこの分野に関する研究の進展が専門化・細分化をもたらしたためであり、従来の研究が交易・商業に関する我々の理解を大幅に深化させたことは疑いない。しかしながらこうした研究動向は、研究者の関心を海域・陸域どちらかに限定させる効果を持つことが多く、実際には陸海両域で連続して行われていたはずの商業活動の理解を不完全にする副作用を伴った。近年は陸海両域を視野に入れた研究も出始めてきているため、本研究はそうした潮流の中で、陸海両域を接続する歴史像を提示することを目指した。

２．研究の目的

（１）交易民としてのアフガン人の活動の実態とその社会経済的背景の解明

本研究は、これまでの研究では「脇役」あるいは「敵役」とされてきたアフガン人を研究の主たる対象とすることで、アフガン人を西アジア・南アジアを股にかけて活動した交易民として捉えなおすことを試みた。具体的には、彼らの交易活動を彼らの置かれた社会経済的状況や西アジア・南アジアの時代状況と合わせて検討することで、交易民としてのアフガン人という、これまで十分に注目されてこなかった視点から彼らの歴史上の重要性を解明しようとした。また、交易民としてのアフガン人に注目することにより、1970 年代末以降現在まで宗教勢力も関与する戦乱が続き、「紛争」「危険」「狂信」といったイメージを色濃く持つアフガニスタンとその周辺地域についても、新たな歴史像を提示することも目指した。

（２）自立的／自律的地域としての西アジア・南アジア境界域の構想

本研究では、これまでの歴史叙述においてほとんど注目されてこなかったインド・イラン・アフガニスタンの国境地帯を「西アジア・南アジア境界域」という一つの地域として捉えなおし、インド洋海域やユーラシア大陸内陸との関連も視野に入れつつ、自律的／自立的な地域として構想することを試みた。そしてこの作業を通じて、とりわけ近現代西アジアについてはいまだに支配的な、国家単位での歴史叙述の枠組みを再検討することを目指した。具体的には、この地域の中でも沿岸地域にあたるマクラーンと、その現地住民であるバルーチ人に注目した。バルーチ人が外来の集団であるアフガン人とどのような関係を取り持ったのかを具体的な検討対象とすることで、マクラーンという地域の歴史がどのような論理のもとに展開していたのかを明らかにすることを試みた。

（３）多様な集団のネットワークの交錯に基づく陸海にわたる交易活動の解明

本研究では、西アジア・南アジア境界域を結節点とし、インド洋海域と西アジア・南アジアの陸域双方で展開されたアフガン人の交易活動に焦点を当てることで、インド洋の海上交易とユーラシア大陸の陸上交易をつなぐ視点を確保することを試みた。その検討作業の中では、他の交易集団との関係構築がアフガン人の交易活動を可能にした事実に注目することで、彼らの陸海にわたる活動がいかなる条件のもとに成り立っていたのかを解明しようとした。

３．研究の方法

（１）アフガン人の武器交易活動の性格の解明

本研究では、19 世紀末から 20 世紀初頭に展開されたアフガン人による武器交易を研究対象とし、彼らの交易活動の実態解明を試みた。この問題に関してはこれまで、交易にかかわった英領インド側の部族、モンスーンと関連した交易の季節性などの基本的事実が先行研究で指摘されてきたが、いずれの記述もイギリス人による報告の引用にとどまり、詳細な分析はなされていな

かった。一方、アフガン人の活動が境界域のみならず、当時のペルシア湾武器交易の中心地であるマスカトにまで及んでいたこと、アフガン人の交易活動がオマーンおよびインドの商人・金融業者との協力のもとに行われていたことなど、興味深い事実も示唆されていた。今回の研究では、アフガン人による武器交易について、その担い手の出自と交易参入の社会・経済的背景、陸海両域にまたがる交易の広がり、そして彼らが交易の際に各地でそれぞれどのような人々と提携関係にあったかを明らかにし、彼らの活動の全体像を捉えようと試みた。史料としては、イギリス国立公文書館所蔵の外務省記録に含まれるペルシア湾武器交易関連文書を中心に、大英図書館所蔵のインド省記録をあわせて用いた。また、アフガン人の交易活動の社会経済的背景については、1970 年代を中心とした時期に欧米の研究者が行った文化人類学的研究の成果を取り入れることによって理解を深めるよう努めた。

（２）マクラーンにおけるアフガン人の武器交易の実態

ここでは、19 世紀末方 20 世紀初頭に展開されたアフガン人による武器交易を研究対象としながら、西アジア・南アジア境界域の中でも海域・陸域の接触点にして「フロンティア」であるマクラーンという局所に注目した。現在のイラン東南部・パキスタン西南部に位置する同地域は、古来インド洋交易とアフガニスタン、インド方面への陸上交易の接触点となっていた地域である。20 世紀初頭のマクラーンでは、武器交易に携わるアフガン人がマスカトから海路運搬された武器を陸揚げし、現地のバルーチ人勢力と協力関係のもと隊商によって陸路英領インドの北西辺境州やアフガニスタン方面に運搬した。この地域では武器交易禁圧を目指す英領インド軍が、ガージャール朝の公認のもと遠征を行っており、その過程で多くの記録が主にインド省記録中に残された。本研究ではこの史料群を主に用い、ペルシア語刊行史料によって補完することで、現地のバルーチ人首長層やバルーチ人ナーホダー（ダウ船の船長）などの海洋民とアフガン人交易者との関係を検討した。また同時に、マクラーンを支配した英領インド・ガージャール朝と現地のバルーチ人首長層との関係に注目することで、彼らとアフガン人交易者との協力関係がいかなる条件のもとに成り立っていたのかをも解明しようとした。このような検討を通じて、「フロンティア」にして陸海両域の交易の結節点としての西アジア・南アジア境界域の性格を明らかにすることを目指した。

（３）武器交易禁圧と西アジア・南アジア境界域の「辺境化」、そして武器交易のゆくえ

ここでは、西アジア・南アジア境界域の「辺境化」とアフガン人による武器交易の「終息」の問題を扱った。通説では、1910 年以降の海上・陸上での英領インドによる交易禁圧活動と、交易の中心地マスカトでの武器交易管理の徹底によって、アフガン人による武器交易は 1914 年ごろまでに「終息」したとされる。この過程は西アジア・南アジア境界域の「辺境化」の最終段階であったともいえるが、禁圧活動によってアフガン人による武器交易が実際にはいかなる運命をたどったのかは必ずしも明らかにされていない。ここでは、英領インド・ガージャール朝双方の史料から西アジア・南アジア境界域における武器交易禁圧の過程を跡付け、この禁圧活動がいかなる性格を持つものであったのかを検討した。また、禁圧によりアフガン人の交易活動にいかなる変化がもたらされたのか、とりわけ、交易は実際に終息したのか、不可視化や他の交易への転換はなかったのかという問題を検討した。この作業を通じて、武器交易禁圧政策が交易ネットワークとアフガン人社会にいかなる影響を与えたのかを明らかにし、西アジア・南アジア境界域の「辺境化」の意義を検討した。

４．研究成果

（１）交易民としてのアフガン人の活動の実態とその社会経済的背景

本研究では、19 世紀末から 20 世紀初めのアフガン人の武器交易活動を研究対象とすることで、彼らの活動の実態を解明できた。とりわけ、彼らの活動には遊牧的背景を持つ武装交易民としての性格が色濃く表れていることが、季節性を持つ移動のあり方や、イギリスによる交易規制に対する攻撃性から明らかになった。このような研究結果は、1970 年代までに行われてきた文化人類学的研究の成果とも符合する。また、交易規制を巧みにかいくぐり、その都度活動のあり方を変化させる彼らの機敏さは、交易民としてのアフガン人の性格を如実に示すものであったといえる。イギリスによる交易規制活動の結果、アフガン人がマクラーンを訪れて交易を行う事例は見られなくなるが、交易が 20 年程度の短期間で終息したことも、アフガン人の地域情勢への巧妙な対応の結果であったと言えよう。

（２）自立的／自律的地域としての西アジア・南アジア境界域

本研究では西アジア・南アジア境界域の歴史的重要性を、とりわけ海岸地帯であるマクラーンに焦点を当てて検討した。この地域には 19 世紀前半以降、英領インドとガージャール朝イランがそれぞれ東部と西部から進出し、自らの領域の中に組み込んでいった。しかし、今回の研究結果から、19 世紀末から 20 世紀初めの時期にあっても、両国家による支配は十分には浸透しておらず、現地のバルーチ人首長層が自立的に支配を行っていたこと、彼らが地域における自らの影響力を基盤に外来の交易者であるアフガン人を受け入れていたこと、英領インド側とイラン側のマクラーンは両国家の緩やかな支配のもとに置かれつつもある程度の一体性を保ち、両者の歴史は連関しながら展開していたことが明らかになった。一方で、英領インド、ガージャール朝

イラン両政府の支配が徐々にではあるが強化されていたことも事実であった。とりわけ、1910 年代に進められたイギリスによる武器交易規制活動は、この地域における国境の存在を可視化するとともに、両マクラーンにおけるイギリスの影響力を強化する結果を生んだ。このことから、アフガン人の武器交易活動とそれに対するイギリスの交易規制活動は、「フロンティア」としての性格を有していたマクラーンがインド・イラン両国家の「辺境」と化していく歴史的過程の中に位置づけることができると考えられる。

（３）多様な集団のネットワークの交錯に基づく陸海にわたる交易活動の解明

本研究では、マクラーンと対岸のマスカトを舞台として展開されたアフガン人の交易活動を、当該地域の他の交易集団のネットワークとの接続の上に成立していたものであると捉えようとした。19 世紀末から 20 世紀初めのアフガン人は、ユーラシア大陸の陸域だけでなくオマーン湾の海域まで進出して交易活動を展開していたが、その活動はマクラーンとマスカト双方にわたるネットワークを有するバルーチ人を筆頭に、アラブ系、イラン系、インド系、そしてこの地域に進出を始めていたフランス系商人など、多様な集団との協力関係の下に成り立っていたのである。この研究成果は、ユーラシア陸上交易とインド洋海上交易双方を接続するものであるとともに、多様な集団の織り成す西アジア・南アジア境界域における交易のありようを具体的事例から明らかにするものであるといえる。また、1910 年代に行われたイギリスによる武器交易規制活動は、アフガン人がこの地域の他の集団との間に有していたコネクションを断ち切る形で行われ、最終的にアフガン人の交易活動の収束を招いた。このことは、彼らの活動が他の集団との協力関係なしには成り立たなかったことを示しているといえ、上記の研究結果を補強するものであるといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小澤　一郎	４．巻 41
２．論文標題 海を渡るアフガン人：一九・二〇世紀転換期のオマーン湾沿岸地域におけるアフガン人の交易活動	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立命館史学	６．最初と最後の頁 95-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小澤一郎	４．巻 681
２．論文標題 ハイル・ムハンマドについて：マクラーンにおける定着アフガン人の交易活動の一側面	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立命館文学	６．最初と最後の頁 616-600
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 小澤一郎
２．発表標題 「現地権力」の尊重：ペルシア湾におけるイギリスの反武器交易運動の論理
３．学会等名 ワークショップ「海洋の縄張り化の近代」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小澤一郎
２．発表標題 19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討
３．学会等名 日本オリエント学会第62回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ichiro Ozawa
２．発表標題 Respect for “Territorial Authorities”: Logics of the British Anti-Arms Traffic Activities in the Persian Gulf
３．学会等名 8th IMHA International Congress of Maritime History: Old and New Uses of the Oceans（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ichiro Ozawa
２．発表標題 Intersecting land and maritime trade networks in Southwest Asia: the Afghan arms trade in cooperation with various trade networks at the turn of the 19th and 20th centuries
３．学会等名 Discovering the Indian Ocean World: Gyres, Indian Ocean and beyond Program（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Ichiro Ozawa
２．発表標題 Cities and settlements in Iranian Makran at the turn of the 19th and 20th centuries
３．学会等名 Qajar Round Table: Urban Landscapes in Qajar Iran（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関